



「平成 28 年度 乳児保育研修会」 報告書



【期 日】平成 28 年 12 月 6 日（火）

【会 場】ゆめぷらっと小城

【主 催】佐賀県保育会

【参加者数】124 名

【内 容】

研修① 10：00～10：20

「基調報告」

指山 健次郎 氏（佐賀県保育会会長）

研修② 10：30～12：00

「心を育む乳児保育 -ゆっくり やさしく ひとつずつ-」

講師 蒲池 房子 氏（清華こども園 園長）

研修③ 13：00～16：00

「保育施設のための深刻事故予防と園内・保護者コミュニケーション」

講師 掛札 逸美 氏（NPO 法人 保育の安全研究・教育センター代表、心理学博士）



研修①『基調報告』

指山 健次郎 氏（佐賀県保育会会長）

1. 佐賀県保育会とは
2. 保育を取り巻く状況
3. 佐賀県による保育士確保対策
4. 保育所保育指針の改定
 - ・平成 27 年 4 月から、子ども・子育て支援制度が施行され、保育の申込者数が急増している。
 - ・佐賀県の保育士確保の取り組みとして保育士資格取得を目指す学生に対して修学資金貸付、潜在保育士の就職支援や在職者への就業継続に向けた施策の充実。
 - ・保育所保育指針の改定については平成 30 年度からの施行を予定している。



研修②『心を育む乳児保育 - ゆっくり やさしく ひとりずつ -』

講師 蒲池 房子 氏(清華こども園 園長)

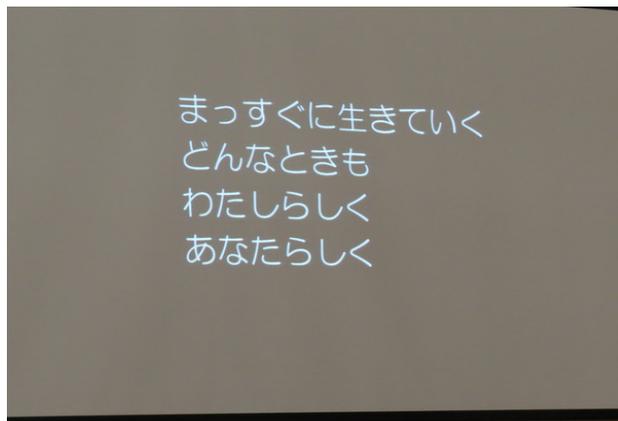


乳児保育の必要性

- ・乳児保育は保育の要である。
- ・乳児期は、温かい人間関係の中で、愛と信頼によって育まれることが何よりも優先である。
- ・『人間としての心を育む』という意識を持って、保育を行うことが大事である。

乳児保育の基本

- ・しっかり見守り、一つひとつをきちんと認めてあげることで、主体性、自己表現力が育つ。
- ・個別保育を重視し、個人差に配慮して、乳児の基本的な欲求(生理的欲求や甘え・依存の欲求)を満たす。生理的欲求を満たすことで快、不快が分かるようになる。依存の時期に自立を求められたら、子どもは甘えられないと思うようになる。甘えられないと心のゆがみが出てくる。
- ・「保育園でのお母さんは私よ」と思って、子どもたちの甘えたい思いを受容する事で、主体的に自立の道へ向かう。
- ・子どもの情緒の安定を図るために、保育者は、ゆっくり、やさしく、ひとつずつ丁寧な保育をする。
- ・保育の専門性とは、生活のひとこまひとこまを子どもと共に生きていく覚悟を持つことである。



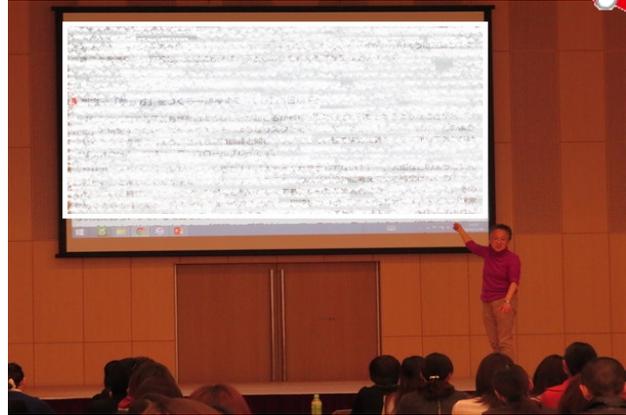
(効果及び評価)

・待機児童や児童虐待、子どもの貧困等、近年、子どもを取り巻く社会問題が取りざたされている
昨今。私たち保育士は、その子どもたちのかけがえのない命をお預かりしている。その中で、
『人間の心を育む』乳児期の保育の在り方は、その後の成長や社会性の獲得等にも大きな
影響を与えるものと考えられる。一人ひとりを愛情豊かに受容し、心身ともに快適に成長発達が
できるよう常に保育者としての眼差し・感じる心を磨き、さらなる保育の質の向上に努めていく事が
重要だと感じた。



研修③『保育施設のための深刻事故予防と園内・保護者コミュニケーション』

講師 掛札 逸美 氏(NPO 法人 保育の安全研究・教育センター代表、心理学博士)



- ・保育施設における深刻事故対応を具体的に作るための考え方として「起きるかもしれない」という想定が不可欠(最初の一步)。「うちの園では、ひどいことは起こらない」と楽観バイアス(人間に必ずある認知の歪み)を持ったままでいたら、予防の取り組みもせず、事故後対応の準備や練習もしない。深刻事故がそのような状況で起きたら、手遅れになる。子どもの命が失われ、園長、職員が社会的責任を問われ、精神面でも仕事の面でも深刻な状況になる。
- ・私たちの園でも子どもが死ぬようなことが起こるかも」と想定するだけではダメ。そのようなリスクを明確に想定したら、「その時、誰が、どのように動く?」と考えておく。避難訓練と同じで、みんなで決めた動き方を訓練しておかなければならない。訓練は真剣なロールプレイである。繰り返し訓練していれば、慌てず焦らず、それぞれの職員(自分がその時すべき役)にすぐつくことができるようになる。

『保育の価値とリスクを伝えるコミュニケーション』として

- ・保育には大きな価値があり、その裏には、必ずリスクがついている。「園庭を走れば転ぶ。鉄棒が出来るようになるのはすごいけど、落ちれば最悪、骨折をする。」いろいろなことが出来るようになればなるほど、子どものけがも増える。あそびや身体活動と傷害は不可分で集団の中では必ず起こる。発達途上の子どもが失敗しながら育つ以上(けが、けんか=育ち学び)、事故や傷害が起こること自体は予防できない。保育の中でリスクというのは『想定内』と考え、深刻な事態を予防する手立てがとられていることを前提として保護者に保育の価値とリスクについて明確な形で伝える(リスク・マネジメント)。
- ・かみつきやひっかき等どんな小さいことでも、起きてからでは遅い。出来事自体ではなく、その人の感情に対応しなければならないので、起きる前にかみつき、ひっかきは「加害」「被害」ではなくあくまでも育ちの文脈の中で起こることを伝える(リスク・コミュニケーション)。



(効果及び評価)

- ・保育園の重要な任務の一つは「子どもの命を守る」ことです。大切な命を預かっているという責任は重く、少しのミスも許されません。一方、成長過程である未熟な子どもと、職員も人であるので、事故を避けることは困難である。今回の研修では「万が一の時のために、最低限、子どもの命が奪われないような具体的な対策」を各園、各クラスで作っていく事、保育の育ちの価値とリスクについては適切なリスク・コミュニケーションを通じて、保護者に伝えていく重要性を感じた。

(文責：みどり保育園 近藤 正子)